

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02587

研究課題名(和文)ポストメディア文化研究の理論構築：創造産業論の日英比較を中心に

研究課題名(英文)Towards New Theories of Media and Culture in the Post-Media Era: A Comparative Study of Creative Industries in the UK and Japan

研究代表者

毛利 嘉孝 (Mori, Yoshitaka)

東京藝術大学・大学院国際芸術創造研究科・教授

研究者番号：70304821

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,400,000円

研究成果の概要(和文)：研究の結果、以下の4点が明らかになった。(1)現代資本主義が「コミュニケーション的資本主義」といった新しい資本主義の様式に移行しつつある。(2)特に創造産業においては流通や循環、環境を制御する「プラットフォーム経済」に軸を移しつつある。(3)グローバル化が一段落し、中国の台頭をはじめメディア情報環境は再び多元化しつつある(4)AIをはじめとする新しいテクノロジーの発達において脱人間中心主義(ポスト=ヒューマンイズム)が理論的にも実践的にも重要な概念になりつつある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

特に英米圏でなされていたメディア理論と関連した議論を日本のメディア環境と比較検討、発展させることを通じてよりグローバルな理論構築を進めることができた。とりわけ、研究期間中にも進んだ非英語圏、特に中国の経済的、技術的、そして思想的な展開を参照点として、日本のみならず東アジア圏のメディア理論の発展の可能性を提示できたことは大きな成果である。またAIをはじめとするメディア環境の急激な変化に対応する「ポストヒューマン」的な脱人間中心的な議論をメディア研究に一定程度導入することができた。

研究成果の概要(英文)：The research revealed the following four points: 1) contemporary (late) capitalism is shifting to a new formation of capitalism such as "communicative capitalism"; 2) the creative industries are shifting their focus to a "platform economy" that controls distribution, circulation, and the environment; 3) globalization has come to a halt, and the media and information is once again becoming more multi-polarized, as we see the rise of China; 4) With the development of new technologies such as AI, post-humanism is becoming an important concept both in theory and in practice.

研究分野：社会学・メディア文化研究

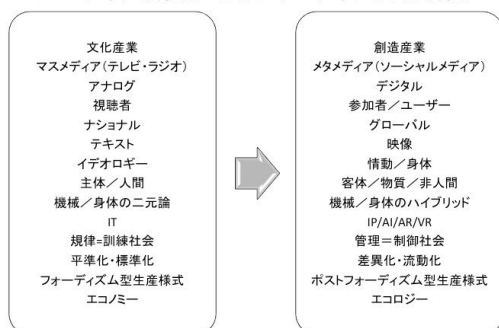
キーワード：メディア デジタル 文化 コミュニケーション プラットフォーム ポストヒューマン

1. 研究開始当初の背景

21世紀に入って情報技術、特にインターネットの発達と携帯端末やコンピュータ等デジタル技術の急速な進歩は、私たちのメディア環境を大きく変容させつつある。新聞やテレビなど従来のマスメディアは、パソコンなどの情報端末の中で融合、統合されつつある。その一方で携帯端末の普及は社会の隅々にまでメディアを浸透させた。さらにポケモン GO などのゲーム機によって一気に広まった拡張現実(AR)、ヴァーチャルリアリティ(VR)、モノのインターネット(IoT)、そして人工知能(AI)は、身体、環境や技術の環境を一変させた。こうした状況を、F.ガタリがかつて「ポストメディア」と名付けたメディア環境として理解することができるだろう(Gapprich et al 2013)。この変化の影響は、現在ではメディアだけではなく社会や経済まで広く及んでいる。

こうした新しいメディア環境の到来に対して、(文化)社会学やメディア研究、文化研究、ジャーナリズム研究など人文社会科学においてジャーナリスティックな研究や実証研究は一定程度見られるものの、理論的な探求が、日本国内で十分に行われてきたとは残念ながら言いがたい。研究代表者が理論的に負ってきた文化社会学、特にイギリスの文化研究(カルチュラル・スタディーズ)を例に挙げれば、研究代表者も寄稿者として参加した『メディア・スタディーズ』(吉見編 2000)が2000年初頭の理論的動向の最前線として広く読まれたが、そこで扱われているメディアの多くはテレビや新聞、映画等マスメディアであり、インターネットの登場以降のデジタルメディアはほとんど含まれていなかった。デジタルメディアの社会的影響の大きさは認識されていたにもかかわらず、その理論的な分析枠組はごく最近までマスメディア時代のままに留まっていた。

マスメディア研究からポストメディア文化研究へ



しかし、近年メディア研究に大きなパラダイムシフトが起りつつある。L. マノヴィッチ等の「ニューメディア・スタディーズ」(Manovich 2013)や M. フラー等の「ソフトウェア・スタディーズ」(Fuller 2008)は、コンピュータのメディア性、アプリケーションやグーグルなどの情報サービスの政治・経済・文化的特徴に焦点を当てることにより、インターネット以降のメディア環境の分析に新しい視座をもたらしている。また L. ブライアントや G. ハーマンなどが提唱する「思弁的実在論」(Bryant 2011)等メディアの物質性や「情動」に対する注目は、これまでのメ

ディアの受容消費、イデオロギー分析、権力に対する新しい分析のための語彙を生み出しつつある。

本研究は、こうした状況認識とこれまでの成果を踏まえて、21世紀の新しいメディア文化研究の理論構築を試みようというものである。特にここで焦点をあてるのは、日英の創造(クリエイティブ)産業である。1990年代後半の英国ブレア政権が「クールブリタニア」と呼ばれる創造産業政策は、日本でも「クールジャパン」政策などにも大きな影響を与えたが、「創造産業」という概念はハートレー他が指摘するように単なる新しい産業という枠組みを越え、生産物、生産様式、消費、余暇、労働、階級という領域を大きく変容させつつある(Hartley 2005)。これは、かつてかつてアドルノ+ホルクハイマーが「文化産業」と名付けた産業(Adorno+Horkheimer 1947)の「創造産業」への移行に対応している。本研究は、国内のみならず海外先進国、特にこの領域でめざましい変化を遂げつつある日本と英国を実証的研究のフィールドとしつつ、国内外の研究者と連携しながら、グローバルな水準での理論構築を試みるものとして構想された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本とイギリスの創造産業の比較検討を通じて、デジタル・ネットワーク社会におけるメディア文化研究の理論を構築することである。インターネットの登場と携帯端末をはじめとするデジタル情報技術の発達は、これまでのメディア環境を統合・再編し、社会全体にメディアを遍在させた「ポストメディア(Guattari 1990 他)」的な情報環境をもたらした。また、技術的発展に加えて政治経済的な変容は、既存のメディア文化産業を変容させ「創造産業」と呼ばれる新しい領域を生み出している。こうした状況に対応し、海外、特に英国の理論動向を参照しながら、具体的な創造産業や(ポスト)メディア文化を分析するための基本的な理論構築を行う。

3. 研究の方法

まずは英米圏でこれまで行われてきたデジタルネットワーク時代のメディア文化理論の文献調査と理論整理を行った上で、それが日本のメディア環境や社会、経済にどの程度応用できるのかを慎重に検討しつつ、英国と日本の現状を主として聞き取りと文献調査を行う。研究の進捗状況については年5回程度の研究会を行うと同時に、情報公開のための国際研究会を行う。後半2年間は、前半の研究成果を踏まえた上でメディア文化産業、特に映像やパフォーマンスなどエンターテインメント産業におけるグローバルな生産、消費、流通、そしてメディア文化政策に焦点をあてて理論化を図るとともに、研究会や国際シンポジウム等による成果の検証、出版や国際学会発表を通じて研究成果の発表に務める。

4. 研究成果

最終年度に予定されていたイギリスにおける調査と海外での研究発表はコロナ禍のために計画変更を余儀なくされたが、研究期間を延長し計画を若干変更した上で一定の成果を得ることができた。特に2023年2月18日(土)、19日(日)に東京芸術大学千住キャンパスで開催された最終成果報告会である国際会議「ポストメディア東京会議 2023」には、アレックス・ザルテン(ハーバード大学教授)、キース・ニーガス(ロンドン大学教授)、マイク・フェザーストン(ロンドン大学教授)などを基調講演者に迎えつつ、研究代表者・研究分担者による成果報告会を行い、オンラインとオフラインあわせてのべ200名程度の参加者を集め、活発な意見交換がなされた。また、研究期間中には定期的に研究会や国際シンポジウムを開催し、マシュー・フラー(ロンドン大学)やグラハム・ハーウッド(ロンドン大学)、ジョディ・ディーン(ホバート&ウイリアム・スミス・カレッジ)、ロージ・プライドゥッチ(ユトレヒト大学)、スコット・ラッシュ、イアン・コンドリー(MIT)、ユク・ホイ(香港城市大学)、アンソニー・ファン(香港中文大学)などを迎え、国際的なネットワークを形成した(<http://postmedia-research.net>)。

研究成果として得られた知見としては大きく次の4点にまとめることができる。

- (1) 現代資本主義においてコミュニケーションや情動といった非物質的活動が、資本や労働、商品経済に取り込まれつつあり、「コミュニケーション的資本主義 communicative capitalism」といった新しい資本主義の様式に移行しつつある。
- (2) 特に創造産業においては、コンテンツやパッケージなど具体的な文化生産物とその消費を中心とした文化産業が、より流通や循環、環境を制御するプラットフォーム経済の軸を移しつつある。
- (3) 東西冷戦構造の終焉とともに始まった市場経済主導のグローバル化が一段落し、メディア情報環境は再び多元化しつつある。特に中国における展開は、アメリカ一国に集中していると考えられていた情報資本主義に対するオルタナティブとして急成長している。
- (4) AIをはじめとする新しいテクノロジーの発達において脱人間中心主義(ポスト=ヒューマニズム)が理論的にも実践的にも重要な概念になりつつある。またこれにあわせて、メディア研究のポストモダン化、脱植民地化、脱西洋=男性=白人中心化が模索されつつある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Mori Yoshitaka	4. 巻 28
2. 論文標題 Lukewarm Nationalism: The 2020 Tokyo Olympics, Social Media and Affective Communities	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 International Journal of Japanese Sociology	6. 最初と最後の頁 26 ~ 44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ijjs.12093	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 水嶋一憲	4. 巻 47
2. 論文標題 転形期の未来：新反動主義かアシッド共産主義か	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 54-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤守	4. 巻 6
2. 論文標題 カルチュラル・スタディーズとしての情動論～「感情の構造」から「動物的政治」へ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『年報カルチュラル・スタディーズ』、カルチュラル・スタディーズ学会	6. 最初と最後の頁 5 ~ 23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤守	4. 巻 46-6
2. 論文標題 新しいメディア生態系を前にして	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『現代思想』、青土社	6. 最初と最後の頁 77 ~ 86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水嶋一憲	4. 巻 46-1
2. 論文標題 コミュニケーション資本主義と加速主義を超えて：横断個性性の政治のために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『現代思想』、青土社	6. 最初と最後の頁 171～182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水知子	4. 巻 1133
2. 論文標題 パロディとしての 父 の誘惑－欲望と「享楽の政治」を再考する	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『思想』、岩波書店	6. 最初と最後の頁 59～78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水知子	4. 巻 47-3
2. 論文標題 「現れの政治」が「忘却の穴」に突き落とされる前に考えるべき三つのこと	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『現代思想』、青土社	6. 最初と最後の頁 109～113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoshitaka Mori	4. 巻 7
2. 論文標題 Affective Labor, Creative Life and the Condition of Cognitive Capitalism : Considering Creative Industries in Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Asia Review	6. 最初と最後の頁 91-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24987/SNUACAR.2018.02.7.2.E.91	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 毛利嘉孝	4. 巻 Vol. 7
2. 論文標題 新しいメディア理論に向けて(日) Toward a New Media Theory(英)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 5: Designing Media Ecology	6. 最初と最後の頁 22-41
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大山真司	4. 巻 Vol. 6
2. 論文標題 クリエイティブ産業研究の制度化について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 5: Designing Media Ecology	6. 最初と最後の頁 84-92
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大山真司	4. 巻 Vol. 7
2. 論文標題 終焉とからの「逆流」と「埋め込み」について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 5: Designing Media Ecology	6. 最初と最後の頁 84-92
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計31件(うち招待講演 15件/うち国際学会 29件)

1. 発表者名 Yoshitaka Mori, Tomoko Shimizu, Kazunori Mizushima and Mamoru Ito
2. 発表標題 Post-Media Ecologies and their Practices
3. 学会等名 Inter-Asia Cultural Studies Society(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshitaka Mori
2. 発表標題 Transformation of Listening Practices in the Age of Digital Music
3. 学会等名 Inter-Asia Popular Music Studies (IAPMS) Conference, Beijing Normal University, Beijing China (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kazunori Mizushima, Tomoko Shimizu, Shinji Oyama, Mamoru Ito and Yoshitaka Mori
2. 発表標題 Emergence of New Collective and Collaborative Subjectivities in the Post-Media Era
3. 学会等名 Crossroads in Cultural Studies, Association for Cultural Studies, Shanghai University, Shanghai China (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊藤守
2. 発表標題 情動化する社会・経済・政治
3. 学会等名 カルチュラル・スタディーズ学会、2018年度大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kazunori Mizushima
2. 発表標題 Towards the Politics of Transindividuation in a Post-Media Era
3. 学会等名 Crossroad in Cultural Studies, Association for Cultural Studies, Shanghai University, Shanghai China (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tomoko Shimizu
2. 発表標題 Bio-Art and After : Medium in the Transhuman Age
3. 学会等名 Crossroad in Cultural Studies, Association for Cultural Studies, Shanghai University, Shanghai China (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清水知子
2. 発表標題 危機の時代の芸術と公共性ー生政治・デジタルメディア・身体
3. 学会等名 Mittagsforum, Free University of Berlin, Germany (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大山真司
2. 発表標題 In The Closet: Japanese Creative Industries and their reluctance to forge Global and Transnational Linkages in ASEAN and East Asia
3. 学会等名 ERIA Workshop at Waseda Creative Industries in Japan and Their Global and Transnational Linkages in ASEAN and East Asia (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shinji Oyama
2. 発表標題 Trans East Asian Fashion Production
3. 学会等名 Crossroads in Cultural Studies, Association for Cultural Studies, Shanghai University, Shanghai China (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoshitaka Mori
2. 発表標題 T-Shrits in Japan
3. 学会等名 East Asia Media Ecology, Harvard University Radcliff Institute USA (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoshitaka Mori
2. 発表標題 The Transformation of the City and Urban Culture towards 2020 Tokyo Olympics: In Comparison to London Olympics
3. 学会等名 London, Rio, Tokyo, Olympic Symposium, University of London, Goldsmiths College (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoshitaka Mori
2. 発表標題 Social Media and the Emergence of Digital Subject
3. 学会等名 2017 Annual Conference of Digital Media Studies: Cyberculture and Digital Humanities, Beijing ROC (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoshitaka Mori
2. 発表標題 Towards Post-Media Theories in Asia
3. 学会等名 Post-Media Research Network, 東京藝術大学 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊藤守
2. 発表標題 メディアと記号の解釈項から考えるポピュリズム」シンポジウム「グローバル資本主義、新たな集会的行動、そして情動の政治
3. 学会等名 カルチュラル・スタディーズ学会、2017年度大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kazunori Mizushima
2. 発表標題 Into the Platformative Situations, Commentary on Thomas Lamarre 's keynote, " Platformativity: Media Studies, Area Studies "
3. 学会等名 East Asian Media Studies Conference, Harvard University USA (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shinji Oyama
2. 発表標題 Japanese Fashion Entering East Asian Market: Making Sense of East Asian Mediascape
3. 学会等名 The Changing Nature of Asia's Media Industries: Liberalization, New Media, and Media Policy (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tomoko Shimizu
2. 発表標題 Re-thinking Transnational Imagination and Diaspora Art
3. 学会等名 InterAsia Cultural Studies Conference, Seoul South Korea (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tomoko Shimizu
2. 発表標題 Animal and the Politics of Landscape in the Bio-political Times
3. 学会等名 Knowledge Culture and Ecology Conference, Universidad Diego Portales, Santiago Chile (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計13件

1. 著者名 伊藤守 (編著)、毛利嘉孝、水嶋一憲	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 400
3. 書名 メディア論の冒険者たち	

1. 著者名 Hiroko Takeda, Mark Williams (eds), Yoshitaka Mori et al	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 532
3. 書名 Routledge Handbook of Contemporary Japan	

1. 著者名 伊藤 守 (編著)、毛利嘉孝、清水知子、水嶋一憲、他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 296
3. 書名 コミュニケーション資本主義と コモン の探求	

1. 著者名 北野圭介編著、アレクサンダー・ザルテン、飯田麻結、依田富子、伊藤守、大山真司、清水知子、水嶋一憲、毛利嘉孝、吉見俊哉 他共著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 303
3. 書名 『マテリアル・セオリーズ：新たなる唯物論にむけて』うち3章「メディア・テクノロジーと権力：ギャロウェイ『プロトコル』をめぐる」北野圭介、伊藤守、大山真司、清水知子、水嶋一憲、毛利嘉孝、北村順生 73～106、担当	

1. 著者名 毛利嘉孝	4. 発行年 2017年
2. 出版社 東京藝術大学出版会	5. 総ページ数 283
3. 書名 『アフターミュージッキング：実践する音楽』編集及び「はじめに：ミュージッキング後に向けて」9 - 32頁を担当	

1. 著者名 Yuko Hasegawa (Editer) Yoshitaka Mori (Co-Author)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Centre Pompidou-Merz, France	5. 総ページ数 247
3. 書名 Japanorama, うち Capter 2 Le Seisme du 11 Mars et Les Medias Sociaux, pp. 20-25	

1. 著者名 伊藤守	4. 発行年 2017年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 267
3. 書名 『情動の社会学～ポストメディア時代におけるミクロ知覚の探究』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Post-Media Research Network ポストメディア研究会
<http://postmedia-research.net/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	清水 知子 (Shimizu Tomoko) (00334847)	東京藝術大学・大学院国際芸術創造研究科・准教授 (12606)	
研究分担者	大山 真司 (Oyama Shinji) (00778946)	立命館大学・国際関係学部・教授 (34315)	
研究分担者	水嶋 一憲 (Mizushima Kazunori) (20319578)	大阪産業大学・経済学部・教授 (34407)	
研究分担者	伊藤 守 (Ito Mamoru) (30232474)	早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授 (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計10件

国際研究集会 Post-Media Ecologies in Asia at Beijing	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Post Media Research Network (PMRN) Workshop: Communicative Capitalism, Speaker: Professor Jodi Dean (Hobart & William Smith College, USA), 東京藝術大学	開催年 2018年～2018年

国際研究集会 Post Media Research Network (PMRN) Workshop: Post-Media Cultural Studies, or Ten Thousand Digital Objects, Speaker: Professor Scott Lash (Oxford University, UK), 龍谷大学	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 Post Media Research Network (PMRN) Workshop: The City, Space and Landscape, Speakers: Professor Mike Featherstone and Dr. Tomoko Tamari (University of London UK) 東京藝術大学	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 Post Media Research Network (PMRN) Workshop: In-between Literature and Media, Speaker: Professor Tomiko Yoda (Harvard University, USA) 東京藝術大学	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 Post Media Research Network (PMRN) Workshop: Sound, Learning and Democracy: Spatial Mixes, Mobile Speakers, and our Post-Media Future, Speaker: Professor Ian Condry (MIT, USA) 東京藝術大学	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Arts and Theoris in the Post-Media Era	開催年 2017年～2017年
国際研究集会 International Conference: Towards Post-Media Theories in Asia	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 Symposium: After Tokyo Olympic: Re-Evaluating of Downtown North	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 Digital Media, Creativity and Capitalism in the age of COVID-19	開催年 2021年～2021年

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------